

## 卓球は四人までたつきゅう

「ねえ、今日、スポーツセンターに行かないか。卓球コーナーの予約が取れたんだ。」  
しゅんは、ひろし、さとし、あきらをさそった。

スポーツセンターの卓球コーナーは人気があって、なかなか予約がとれない。しゅんは家の人にたのんで、ようやく予約がとれた。

「昨日、お父さんとスポーツセンターにならんで、ようやく予約がとれたんだ。」

四人が卓球の話題でもり上がっていると、その話を聞いていたとおるが、

「ぼくも卓球をやりたいな。仲間に入れてくれないか。」  
と言ってきた。



とおるは、卓球クラブに入っている大の卓球ずきとして有名ゆうめいだった。

でも、とおるとはとくべつ仲がよかったわけではないので、しゅんは、始めはじに声をかけた三人の顔を少しだけ見たあと、

「だめだめ。だってダブルスの試合しあいをやるから、四人でないとだめなんだ。時間は一時間半と決きまってるんだ。だから、四人まで。」

とことわった。

とおるは、何も言わず下を向むいたまま、しゅんからはなれていった。

授業中じゆぎょうちゆう、しゅんはさっきのことが気になって、ときどき、とおるの方を見ている。

昨日、しゅんのグループが給食当番きゆうしよくのとき、当番でもないのに牛乳運ぎゆうにゅうはこびを手伝てつだってくれたのは、とおるだったからだ。

(とおるに悪いことをしちゃったかな……。)

その日の帰り、教室の出口で、しゅんはとおるにかけより、声をかけた。



「とおるくん、さつきはごめんね。今日、きみもスポーツセンターに来ていいよ。」  
しかし、とおるは小さな声で、

「卓球は四人までなんだろ。」

と言って帰ってしまった。

しゅんは、何とも言えない気持ちになった。

その後、四人で卓球をしたが、しゅんはあまり楽しくなかった。

卓球の中でしゅんは、

「今日、ぼくはとおるくんにひどいことを言っちゃった。どうし

よう。」

とみんなに相談した。すると、みんなも気になっていたようで、

「ぼくたちも、気になっていたんだ。」

と言った。



四人はとおるにあやまろうということになった。そして、次の日曜日にとおるをさそって、しゅんの家で五人で遊ぼうということになった。

次の日、四人は、早めに登校し、校門でとおるが来るのをどきどきしながら待った。